

◇九州短歌大会講演

歌ことば今と昔



岡井 隆

(おかい たかし)

昨年五月九日(土)、長崎県自治会館で開催した九州短歌大会のご講演の再録です。「歌ことば」という特別な言葉があるわけではありませんが、短歌ならではの独特な言葉のありようを、实例によって、岡井先生がユニークな検証をしてくださいました。

◇「歌ことば」とは何か

歌ことばの今と昔といっても、万葉の昔まで遡るつもりはないので、大体は明治以降ということを考えております。「歌ことば」とは何か。歌の中に入ってきたことばはみんな「歌ことば」かといえ、そうでもないんです。

例を挙げながら話してみましようか。たとえば、鳥の名前。野性の鳥で雁。渡り鳥として有名で、昔から和歌の世界に詠み込

まれています。

斎藤茂吉の歌で

・春の雲片寄り行きし昼つかたとほき真菰
に雁静まりぬ

という歌があります。三月、北へ帰る寸前の雁を見に行ったわけですね。弟子を二人連れて、歌を作るためですね。空を流れている三月の雲が、ずうっと片寄っていく。

そういう「昼つかた」、お昼ごろ、「真菰」は水辺の植物としては有名ですが、朝騒がしく餌をあさっていた雁の群れが昼ごろに

なると遠くの真菰の繁っている岸边のところで静かに休んでいるという歌です。どこが歌ことばかという、まず目につくのは「昼つかた」。「昼つかた」というのは「昼」と少し違う。「ヒル」というと二音ですが、「ヒルツカタ」というと五音で、ちょうど五五七七の五のところにあてはまる。「夕まぐれ」というのもそうですね。「昼つかた」とか「夕まぐれ」というのは、これは短歌、あるいは詩歌独特のことばです。話しことばの中で使われなくなったことば、こういうのがある意味で歌ことばです。では、「春の雲」ってのはどうでしょうかね。「雲」は普通に言いますね。季節をここへ入れて、秋の雲、春の雲、夏雲、こうなると短歌っぽい。歌ことばです。片寄るといふのは普通のことばですが、「行きし」の「し」というのは、これは古典文語ですから、この辺も短歌用語でありましよう。「とほき」、ふつうの話しことばなら「遠い」ですね。では「真菰に」の「に」はどうでしょう。普通だったら真菰が生えているあたりにというところまで説明するんですが、それを「に」という助詞によって簡潔に言ってい



る。「がん／しずまりぬ」というのは二音と五音でありまして、これは二五調です。こういう収め方も短歌的。

明治以来、言文一致運動というのがありまして、書くことばをなるべく話すことばに近いところへ持っていくということをやってきました。その中で、現在まだ文語の力を信じて使っているのが歌人で、短歌の中では「春の雲」「片寄り行きし」「昼つかた」「とほき真孤に」「雁静まりぬ」というようなことを言い、それでいてちつともおかしくない。いい歌だというふうに思う。響きが荘重だなどと思う。

もう一首、斎藤茂吉の歌

・この国の空を飛ぶとき悲しめよ南へむか

ふ雨夜あまよかりがね

このとき斎藤茂吉は山形県の自分の郷里、上ノ山へ疎開していました。六十三歳です。肋膜炎にかかって寝ていました。雨の夜で、声は聞こえるけれども、実際に見えていくわけではない。南へ向かって雁が渡っていく。この「かりがね」というのは雁の鳴く声をさしていると同時に、鳥をさしてもいます。すると、これはきわめて短歌的なことばといえます。「雨夜かりがね」、雨の夜にかすかに雁の渡っていく声が聞こえる。「この国の空を飛ぶとき悲しめよ」というのは、戦争で負けた日本の国の行方が心配である。「雁よ、どうぞこの国の空を飛ぶときにこの国の現在を悲しんでやってください」という歌ですね。「この国の空を飛ぶとき悲しめよ」というのは、先程の「昼つかた」なんかに比べますと、言文一致に近いわけでありまして、「南へむかふ雨夜かりがね」。たった七音で雨が降っていて、夜であって、雁が飛んでいるという三つの状況を詠んでいる。しかも「かりがね」と

いうのは、鳥の名であると同時に鳥の声である、と二重化させて使っています。こういう、非常に濃縮された日本語、濃縮された七音です。こういうのは短詩型文学、五七七七七という約束があるために発明されてきた言い方で、記紀歌謡以来の、短詩型の中にあります。

同じところに斎藤茂吉がつくった雁の歌をもうひとつ。

・幻まぼろしのごとくに病やみてありふればこの夜空を雁かりがかへりゆく

肋膜炎で熱が出て幻のようにぼうっとした感じ。「ありふれば」は、経過する、病んだ状態がずうっと続いていること。この夜空を今度は鳴きながら雁が帰っていく、そういう季節にいつのまにかなったという歌です。

◇「歌ことば」のおもしろさ

ちよつとおさらいします。「春の雲片寄り行きし昼つかたとほき真孤に雁静まりぬ」「この国の空を飛ぶとき悲しめよ南へむかふ雨夜かりがね」「幻のごとくに病みてありふればこの夜空を雁がかへりゆく」は同

じ鳥が三つのことばで言われています。ガン、カリ、カリガネ。雁が音という場合は、おのずから音が含まれます。なぜ一つの種類の鳥を呼ぶのに、このようにいくつかの言い方があるのか。「雁静まりぬ」、ここは「ガン」。また「雨夜雁の声」ではいやだ、アマヨカリガネと澄んだことばがいい。斎藤茂吉のホキヤブラリーの中に、ガンもあればカリもあればカリガネもある。また、あるいは抽象化して鳥とも言えます。ひとつの鳥をこういうふうと言葉の上で使い分けられるというのがおもしろいですね。短歌という不思議な古い詩型が残っていて、その定型を大事にして歌をつくり、それを読む。そういう創作と読みの総合した習慣を残してきているのが日本人、つまり日本語を使っている人間だという定義もできそうです。

こんどは、北原白秋の歌。

・新らしき野菜畑のほととぎす背広着て啼
け雨の霽れ間を

大正の初め、白秋だってまだ三十になるかならないでしょう。背広、これは「シビルウエア」という英語を、背広と訳した人

も実に気がきいていると思いますけどね。白秋が「背広着て啼け雨の霽れ間を」と言っているのは、ホトトギスに自分を投影しているわけであります。ホトトギスというのは古来たくさんいろんな形で歌われていまして、すけれど、「背広着て啼け」と歌った人はいなかった。最後まで童心を失わなかった詩人であった白秋が、若いころにこういう歌をつくっているわけですね。歌ことばとしては「ホトトギス」という長く詩歌などに取り入れられている象徴的な夏の動物の名。鳴いて血を吐くほととぎすのような形でなくて、明るく現代的で、そして背広と結び付けられて、とらえられている。

白秋の歌をもうひとつ。

・行く水の目にとどまらぬ青水沫あみかた、これ
は触れにたりけり

行く水の目にとどまらぬ「青水沫」、これは歌ことばでしょう。水、水沫を、「みなわ」と読む。その上に青という色彩をつけ加えただけで、うたかたの流れっていく感じが視覚的に出る。また、「たりけり」というところにも短歌特有の語法があります。鶴鶴はご承知のように川原へいらっしやればいっ

ぱいいるわけであります。白秋は、「鶴鶴のしっぽが行く水の目にとどまらぬ青水沫に触れたよ」と言っているんですね。「触れにたりけり」、五七五七七のリズム、音数律のリズムの要請に従ってこういう言い方が出てきたのです。

◇近代短歌百年のなかで

私は今、現代短歌の辞典というのをつくるお手伝いをしていまして、明治以来の約百年、二十世紀って何だったんだろう、日本語にとって何だったんだろう、短歌が減びないでずうっときたけど、これどういことなんだ、と考えてこの百年ととりくんでおります。短歌がブールしてきたもの、そこに貯められてきた宝のようなことばが歌ことばです。「昼」とか「夕」という以外の「ひるつかた」「夕まぐれ」のような特別な言葉や語感を捨ててしまったことは、よかつたのか悪かつたのか。短歌の世界にだけはこれを残しておこうじゃないか。おれ、おいら、あるいははよくと言ったりする以外に「我」とか「わ」とか「あ」というのも昔はありました。「あは悲しもよ」なんてい

う、その「あ」とか、「わ」とかというの mouth 口語としてはなくなっちゃった。「我」もなくなっちゃった。にもかかわらず短歌はいつまでたつても「我は言ひたり」とか言っている。それで何もおかしくない。これはどういうことだ、これは貴重なことではないか。

◇新しい「歌ことば」

現代はどうでしょうか。平成十年の河野



愛子賞を受けた河野裕子の『体力』という歌集。この歌集には鳥の歌はほとんどないんです。が、あえてきょうは話の筋に沿って鳥の歌を歌集から探してみます。

・陽ざし著くしろく射しあるホームの端冬羽ふさふさと鳩が歩める

ブラットホームの端、冬になってだんだん温度を保つために冬羽がはえてくる。夏は羽が抜けていくというのが鳥の習性ですよ。この歌は、平明な感で妙に短歌らしいことばを使わないで、何でもなし、その辺で見ているような、日常的な鳥です。また、

・風なかを少しの浮力つけ歩む鷺にも鴨にも踵かかとが無くて

これは踵がないということに作者のひとつの感慨がある。鷺とか鴨というのは、風の中でふわあ、ふわあとき軽いつれをつけて歩いている。少し浮力をつけて歩いているよというところが発見なんでしょう。短歌的なことばはあまり使わなくて、ごく平明であります。生活の中へ紛れ込んでくる動物としての鳥を見ている。もうひとつ、これは鳥ではないんですけど、鯉。

・眠い眠い私のからだをひきこみて鯉だよ
おまへはと水が寄せ来る

という歌があります。何か大きな鯉が、寝ていくような、眠い、眠いという感じ。おまえさんは鯉だよ、そう言いながら水が寄せってくるような中ですうっと眠っていく。

斎藤茂吉の「雨夜かりがね」の場合、地上にある自分と向こう側に飛んでいる雁とを引き離して、ああ自分が雁のように帰っていったらなあ、自分はここで幻のごとく病んで寝ているんだといって、嘆いていたのに比べますと、河野さんの歌は、よほど感情移入がされています。自分自身がそういうものになり変わっているところがあります。何となく明治以来使われてきた歴史的なことばとしての歌ことばが現代は変わっていつている感じがいたします。

水原紫苑の歌。

・くちづけの深さをおもひいづるとき雲雀よ雲雀そらを憎めよ

ひばりもこれはある意味からいうと、典型的な夏やら春の代表的な鳥です。それを使っているわけですけど、最初から「くちづけの深さをおもひいづるとき」などと、

すでに男女という意味で愛情とか性愛とかいうところへテーマを設定しているわけがあります。「空を憎む」というのは、解釈の仕方はいくらでもあるわけでありませう。茂吉の「この国の空を飛ぶとき悲しめよ」、その悲しみというのを敗戦というものにかかわって解釈をいたしました。その解釈も茂吉とその時代を知っていないとはつきりしません。それと同じように、水原紫苑はこの歌で何を言おうとしたのかなということになってきますと、これは歌人の個人の気持ちの中に入っていくとわかりにくい。茂吉の場合は比較的明快にわかるにもかかわらず、こちらの場合は難解な解釈をいろいろに許すところがある。

今度が高野公彦のひばりの歌。

・ふかぶかとあげひばり容れ淡青の空は暗
きまで光の器

あげひばりというのは昔からある言葉です。雁が音というような言葉などにも似ているひとつの韻文的なことばであります。容れる、容器の容という字を書いています。容というのと器というのが相對している。薄い青色をしたあの空というのはひとつの



器であつて、それが広がって円球をなしている。その器の中へ次から次へとあげひばりが上がっていく。そのあげひばりを深々と吸い込んでいる。いわば器が逆さまになっていて、そこへひばりが注ぎ込まれていくんだという見立てをしているわけですね。あまりにも光り輝いていると、少し暗く見えるということがありますね。非常にきれいにでき上がった歌であります。

歌ことばについて、この八十年か九十年

ぐらいの間の歌を、いろいろな形で鳥というもので通して取り上げてみてみたわけがあります。歌ことばが、どういうふうに移ってきたか。ひとつは、やはり否応ない、現代の工夫の取り入れというものが出てまいります。それから平明な普通のことばで言おうとして、ものものしい造語的なことばというのはだんだん少なくなっていく。平明なことばを組み合わせることによって、複雑な屈折した心理を言うことになる。わかりにくくなり、読み手もいろいろ頭を悩めます。どちらかというところ、自分のほうの心境とか実体とかいうようなものを表現するためにことばの力を借りてくるというふうな、ことばが先行する形になっていく。こういう中から、我々が財産として受け継いできた歌ことばというものが今後どうなるだろうかというふうなことに關しては一面、危惧のようなものがあり、また、現代の新しい歌ことばというのがこれからまた作られていくのかなというふうな予想と期待もあります。鳥というテーマで、歌を引きながらきょうは申し上げました。これで終わります。